

甘えるな！一創造者の立場に立つことを学べ（1）

神に復讐するか、神を庇うか？／スティーヴン・ホーキングとイルミナティ

Greatchain

2018/7/16

マルクスの若い時の詩の一節——「俺は自分自身に向って堂々と復讐したい、高い所に君臨しているあの者に復讐したい」——を、現在のイルミナティ NWO の精神構造を的確に説明するものとして、私は何度か引用してきた。

これはちょっと見には、いかにも英雄のようでカッコイイが、これほど甘ったれた思想はない。彼らの何が悪かといえば、それは彼らが残酷で、人を人とも思わず、神の創ったものを凌辱し破壊して勝ち誇ることだが、この徹底した悪の中心に何があるかと言えば、それは、この世に生まれてきた自分の責任というものを、全く感ずることのない、甘ったれ精神である。彼らは不幸な者たちだが、わかりやすく言えば、「私がこんなに不幸なのは、みんなあなたが悪いのよ！」という、腹の底に復讐をもつ、暗く、非生産的な思想である。これまで思い上がった無神論者は、信仰者のことを、神に頼り、神に救いを求めるだけの、無能な弱者であるかのように言うのが一般的だった。これは全く逆にしなければならない。まさに真逆である。

我々は今、この時代に対処する本当の仕方を、神のあり方を含めて、ほかならぬこの者たちサタン信仰者から学びつつある。

私が最近、毎日のように取り上げている NeonNettle は、相変わらず、ペドフィリアの記事が多い。犯人への残酷なリンチの記事も多い。ある者たちは、「ペドフィリアはどうすることもできない欲求なのだから、我々の権利だ、LGTB と同等に扱い、これを“ノーマライズ”せよ」と、エリートの回し者のようなことを言っている。典型的な甘ったれども！！

「子供は男か女のどちらかに生まれてくるのであって、“性別の流動”などというものはない」と主張したために、長年勤めてきた NHS（国民保健サービス）のトップの地位をクビになった、ある英人医師がニュースになっている。これはわが国でも、口を尖らせた過激左翼の下で起こりそうな事件である。この「流動」は、人間とサルとの流動と同じである。アメ

リカではこれが、Intelligent Design をダーウィンと比較して教室へ持ち込んだために、無数に起こっている。すなわち彼らは、学問の命である自由な発想を、禁止しようとする弱者どもである。私の知る限り、暗殺されたケースはないが、高校や大学、研究所をクビになった者は数知れない。理由は両方とも、politically incorrect、すなわち権力者のご意向で正不正が決まるということで、神への復讐を狙っている異常者どもの邪魔をすることは許されず、社会はそれに従っているのである。

創造者（自然）は当然、男と女を別々に創った。それがたまたま、男女の区別がつかない状態で生まれることがある。これは神（自然）の過失であろう。その過失そのものに、何かの理由があるとすれば、それは我々の考えの及ばないものである。我々の母親が、障害児を産んだとき、その生まれてきた子は、母親に復讐しようと思うか？ 産んだ母は、その子に対して、いい気味だと思うか？ そんなことはありえない。障害のある子は、親を悲しませまいと、障害を隠せるものなら隠して生活しようと思うだろう。神に対する我々の関係も同じである。神が意図的に、悪意をもって異常児を作ったのでない以上、我々のなすべきは、神を恨むことでなく、それを選ばねばならなかった神の事情を、察することでなければならない。これが宇宙と一体化するという、人間の最も偉大な思想である。母親を庇うように「神を庇う」「神を救う」という考え方を、ある宗教家から知ったとき、私は目が開けるように思った。最近、法王フランシスが「聖職者は神より力をもつ」と言って(NeonNettle, 7/13)、世を驚かせたが、そのような傲慢とは縁がない。

このような障害や異常をもつ人間を、差別してはならないと主張しながら、逆にこれ見よがしにするのが、左翼的人間破壊者のやり方である。その特徴が最もよく現れていたのが、イルミナティ主催の、2012年ロンドン・パラリンピック閉会式の出し物であった。ここでは、障害者の人間の尊厳を主張するように見せて、実はその反対のことをやっていた。身障者の尊厳や対等性を主張するためには、その人の**創造本然の美しい姿を、想像できるように演出しなければならない**。(我々は、身障者が車椅子でバスケットボールをやる時、彼らが身障者であることなど忘れていた。試合を見た後残るのは、彼らに対する敬意と賛嘆だけである。)しかし、彼らイルミナティ演出者は、ことさら身障者のありのままの姿を見せて、そこから目を背けようとする観客を、暗黙のうちに非難しようとするように見えた。それくらい露骨だった。

これはインターネットで簡単に見られるので、ざっとでよいからご覧願いたい。まず、この出し物は、シェイクスピアの最後の劇『テンペスト』を下敷きにしている。シェイクスピアの中でも、最も神的な内容をもつこの劇を、彼らはことさらサタン化した。彼らには細かい、サタンの計算があるはずであるが、我々には、はっきりわからない。ただ、途方もなく沢山の病院のベッド、歩き回る背の高い魔女、頭に傷のある、不気味な巨大な赤ん坊、などが

見える。…まず、この会場の中心に、巨大なご本尊があることがわかる。それは、頭部は立派な男性だが、首から下は女性で乳房があり、腹部が大きく妊娠しているらしい。しかも両手両足がない。こういう身障者がもし現実にいるとしたら、何とかその人の肉体を隠し、最も美しく見える部分や能力だけが、目立つようにしてあげるべきであろう。しかしここでは、この醜い巨大裸像は明らかに、神に代わのご本尊だ。そして、この劇の最も美しいはずの女主人公ミランダは、男か女かわからない、髪も短くして衣服も粗末な人物である。すべての細目に、神に逆らう意図、意図的冒瀆がはっきり表れている。

そして極めつけは、車椅子の物理学者スティーヴン・ホーキング博士だった。いまこの方が亡くなったので、少し話しやすくなった。この先は、次に回すことにしよう。